

---

# ネギま！太陽の戦士

葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！太陽の戦士

### 【Nコード】

N0215Y

### 【作者名】

葉月

### 【あらすじ】

- 神奈川県川崎市で繰り広げられる壮絶な善と悪の戦い -  
天体戦士サンレッドと、悪の組織フロシャイム川崎支部ヴァンプ將軍。

幾たびの激闘により築かれた、友好的な敵対関係（ヴァンプ談）  
そんな二人が、バイクでツーリング中に謎の発光現象が！  
二人が目覚めるとそこは神奈川県川崎市ではなく埼玉県麻帆良市  
！？

常に全力を出すことが出来なかったヒーローは、己が力を存分に振るい、白き翼を照らす太陽となる！

天体戦士サンレッドと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。

苦手な方はお気をつけください。

処女作ですので拙く、誤字脱字も多いと思いますが、よろしければ見てやってくださいませ。

## プロローグ（前書き）

初めまして！

皆さんの小説読んで触発されて、勢いのまま書いた駄文。処女作品ですので至らないことが多々あると思います。

それでも駄文なりにがんばっていきたいとおもいます！

よろしくお願いします！

## プロローグ

神奈川県川崎市のとあるマンション

ピンポン・・・

「おい、かよ子ー？誰か来たぞー？」

リビングで寝転がってテレビを見ている男性は動こうとはしない。

「はいー！」

奥から呼ばれた女性・・・かよ子が応対の為、玄関に向かう。

戻って来たかよ子と来客の話し声。

「いつも助かります。ヴァンプさん。」

「いいのいいの、気にしないで！たくさん作ったほうが美味しいからね、お料理は。」

来客は、おすそ分けを持って現れたヴァンプ將軍。

言動はただの主夫だが、それでも世界征服を企む悪の組織フロシャイムの幹部である。

「まあ、たお前かよ、ヴァンプ。ホント、気軽に来るよなお前は・・・。」

「ちよつとアンタツ！折角おすそ分け持って来てくれたヴァンプさんにまたそんなこと言って！」

「まあまあ、かよ子さん。レッドさんも本気じゃありませんよ。ね？レッドさん。」

「勝手に言ってる！」

この悪態ついてる男性こそ・・・、天体戦士サンレッド。  
神奈川県川崎市で日夜、世界征服を企む悪の組織フロシャイムと戦  
い続けるヒーローなのだ！！

たとえ働きもせず、彼女のかよ子に養われているヒ。であっても！  
そう！。モであつても！ヒーローなのだ！！

たとえ悪の組織の幹部がおすそ分けに来るほど近所付き合いがあ  
るうとも！ヒーローなのだ！！

かよ子とヴァンプが世間話で盛り上がってからしばらくすると、再  
び来客を告げるチャイムが鳴った。

ピンポン・・・

「あ、今度こそ来たかも！」  
嬉しそうに玄関に向かうかよ子。

「何が来たんだよ？」  
「？」

一方、訳が判らないレッドとヴァンプ。

しばらくしてかよ子が戻ってきた。しかも満面の笑みで。  
ますます訳の判らない二人。

「うふふ、二人とも着いてらっしゃい♪」  
「「？」」「」

かよ子に促され、外に出てきた二人の目の前にあったのは一台の赤  
を基調としたレーザータイプのバイクだった。

「お前っ！これっ！どーしたんだよ！？」  
動揺するレッド。

それもその筈。

このバイクは以前、金に困ったレッドが中古屋に売りに出したヒーロー用バイクだった。

「アイツら（フロシャイム）相手に必要ねーから。」とはレッドの言葉。

「ふふっ、中古屋さんに出てたから買ったのよ。アンタにプレゼントしたげようと思って。」

「凄いじゃないですか！レッドさん！」

ヴァンプとしては、ヒーローらしく対決に登場したりしてくれるのでは？

と、期待が高まるばかりである。

正直、かなり望みは薄いのだが・・・。

「アンタ、ヒーローなんだから、乗り物のひとつでも持っていないと格好つかないでしょ？」

「そうですよ。ささ！早速乗ってみせてくださいよぉ。」

「・・・なんでデメエに見せなきゃなんないんだよ・・・。」

「別にいいじゃないの。アンタ、前にヴァンプさんの新品の自転車失くしてるじゃない。お詫びに後ろに乗せてあげてもいいくらいよ？」

かよ子の言うとおりレッドは以前、ヴァンプの電動式自転車を紛失したことがあるので（翌日に取り戻したが）それを言われると負い目も相まって、強く出れない。

「・・・ちっ、わかったよ！後ろに乗つけてやりゃいーんだろ！乗

っけりゃ！」

本当はかよ子に乗せてやりたかったレッド。

しかし当の本人から言われてしまったのだから、もうヤケクソである。

「おら、来いよヴァンプ！」

レッドとしては慣らし運転も兼ねて借りも返して、さっさと終わらせてしまいたい。

と、気持ちを切り替え、久しぶりのバイクに跨った。

「えゝ、悪いですよゝ。」

口では遠慮してるものの、興味深々のヴァンプ。

「いいから早く来いってんだっ！」

「ひいっ！！すぐ乗りますゝ！！！」

慌てて後ろに乗り込むヴァンプ。

「気をつけていってらっしゃい。あんまり危ない運転しちやダメよ？」

「おー、わかってるって。じゃ、いつてくるわ。」

「いつてきます、かよ子さん。」

レッドがバイクを起動させる。

持ち主の所に帰って来た、ヒーロー用のモンスターマシンが喜びを表すかの如く唸りをあげる。

ヴオオオオオオンッ！！オオオオンッ！！

颯爽と去っていくレッド達。

「プレゼントしてよかったわ、あんなに嬉しそうにしちゃって、」  
ご機嫌なかよ子であった。

ギヤオオオオオツツ・・・！！！！

颯爽と風を切る一台のバイク。言うまでも無くレッド達である。  
既に法定速度なんて無視である。

「ち、ちよつと、レッドさん！？」

「くくく」

鼻歌交じりで反応がない。ご機嫌である。

「レ、レッドさん！？レッドさん！？」

「くく・・・ちつ、んだよ？ヴァンプ。」

「慣らし運転じゃないんですか！？」

初めてのバイク、初めてのスピードにヴァンプはもう楽しむ余裕がなく、恐怖でいっぱいである。

「スピード出さなきゃ楽しくねえじゃねーかよ。」

そう言いながら更にスピードをあげるレッド。

「ひいひい！？・・・ん？」

スピード計を見ようと覗き込むと、ハンドル中央にチカチカと点滅するボタンを見つけたヴァンプ。

「レッドさん、そのスイッチは？点滅してますけど・・・。」

「あん？これか？これは・・・なんだっけ？ま、押してみりゃわかるか。」

ポチッ

バイク、そして搭乗しているレッドとヴァンプが赤い光とスパークに包まれ始める。

バチッ・・・！バチバチッ・・・！！  
ピカアアアアア！！

「あれ・・・？」

「え？ち、ちよつと！？レッドさん・・・」

そして、一際激しい閃光！

ピカッ！！！！

赤い閃光が収まると・・・

二人の姿は何処にもなかった・・・。

これが運命の始まり。  
交わることのなかった二つの世界。

全力を振るえない正義のヒーローと、英雄の遺児。

白き翼が太陽の加護を得た時、運命の歯車が回り始める。

## ブローグ（後書き）

投稿が予想よりも遥かに恥ずかしい!!

11 / 1 修正

## F i g h t . 0 1 ( 前 書 き )

続けて投稿。

作成スピードがあがらない！orz

## F i g h t . 0 1

「う．．．、うん．．．。」

倒れていた男性が目を覚ました様だ。

その男性は起き上がるとすぐさま、自身の身体に怪我がないか確認を始める。

背はかなり高く、Ｔシャツの上からでもはっきりと分かるほど、かなり鍛え上げられている肉体。しかし、彼を見て一番目を引くのは身体ではない。

では何処を見るのか．．．？

それは顔．．．正確には頭部である。

何故なら、特撮番組の正義のヒーローの様な完全に頭部を覆った赤いマスクであつた。

彼の名は『天体戦士サンレッド』

正真正銘、正義のヒーローだった。

「ん．．．？」

レッドはすぐ近くにもう一人が倒れているのに気がついた。

「おい．．．、おい、ヴァンプ．．．。」

軽く身体を揺さぶる。

ゆさゆさ．．．

「う、うん．．．むにゃむにゃ．．．。」

なかなか起きない。

「起きろっ！埋めるぞ！コラアッ!？」

「ひいつ!？スイマセン！レッドさん!!」

怒鳴り声に、ほぼ反射のみで起き上がる男性。

古代ローマ兵の様な兜、立派な髭、紫のローブという目立つ格好のヴァンプ。

こう見えて、世界征服を企む悪の組織『フロシャイム』の幹部である。

普段は人のいい、カリスマ主夫で、天敵レッドとも（ヴァンプ曰く）良好的な敵対関係（笑）を築いている。

「さっさと起きねえからだろうが。」

「そ、そんなに怒らないでくださいよ、レッドさん。」

「ちっ・・・、んで？怪我とかはねーのかよ・・・。」

「え・・・と、特にありませんね。」

「そーかよ・・・。」

「あの、それでレッドさん・・・？」

「あん・・・？」

「ここ、どこでしょうか・・・？」

「さーな？こっちが聞きてえよ・・・。」

見渡す限りの木、木、木。

しかも時間は夜。闇夜に三日月が浮かんでいる。

「ちょっと待ってる。」

「え・・・？」

そう言うと、レッドは神経を集中させ、能力を発動させる。

『レッドイヤー』

・レッドマスクの機能の一つ。最大半径10kmの物音を聞き分ける能力・

「・・・ん？・・・これは・・・？」

「何が聞こえたんですか？」

「片方は女・・・？いや、子供か？もう片方は・・・獣か？それもありデカいな。」

「ええ！？大変じゃないですか！？何落ち着いてるんですか！！その子を助けてあげないと！！」

「んゝ、でもこの音は・・・。」

「早く！正義の味方なんですからっ！！レッドさん！！」

「あーもー！行きやいいんだろ、行きや・・・。」

レッド達の位置から少し離れた場所

レッドが察知した音源を作り出している二つの存在

・・・ギンツ！！・・・キキン！！・・・ガツ！！

小さな影と大きな影

小さな影は、月光を思わせるほど煌びやかな金髪、透き通る様な白い肌。

可愛らしく整った顔立ちも相まってアンティークな西洋人形を思わせる10歳頃の少女。

しかし、その端正な顔は現在、苛立ちによって歪んでいる。

「ええいつ！忌々しいっ！」

彼女は焦っていた……。戦闘におけるパートナーと寸断され、孤軍奮闘していたが、魔法を発動させる触媒……。魔法薬も体力も既に底を尽いている。

「こんな雑魚に手こずるとは……。！」  
そう言つて、肩で息をしながら相対する大きな影を睨む。

「その雑魚に苦戦しとる癖に、デカイ態度の嬢ちゃんやなあ。」  
大きい影に月光が照らされる。浮かび上がるのは異形。成人男性を遥かに超える身長、筋骨隆々な巨躯、丸太の様に太い手足。しかし、何よりも異形足らしめているのは、頭部より生えている角と、大きな牙。

- 鬼 -

太古より闇の住人として存在している者達。  
只の人間が抗うことも出来ない屈強な存在である。  
そんな存在が目の中の少女に語りかける。

「堪忍やで？ワイかて嬢ちゃんみたいを手にかけるんはイヤなんやけどな、嬢ちゃんは暴れすぎや。仲間大勢やられてもうて、見逃すつちゅーんは出来んのや。命令もあるしな。……。ホンマ堪忍な？」

そついい、少女の身の丈以上はある棍棒を振りかぶる。

少女は体力の限界でもう動けない。  
ならば死を静かに受け入れようと目を閉じた。

ビュオツツ!!

棍棒の風を切る音が迫る。

ズンツ!!

重たい衝撃音。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

「・・・？」

音はすれども、一向に痛みが来ない。  
目を開くとそこには・・・

月光を反射し、闇夜を照らす赤いフルフェイスの男が

横合いから『片手』で棍棒を受け止めている。

「ふう・・・、間一髪ってどこか？」

「「なっ!？」」

新たな乱入者に鬼も少女も驚きの声をあげる。

レッドとしては少女が鬼に襲われているから横槍を入れただけであ  
って、状況とかちんぷんかんぷんである。

とりあえず、デカイ方をぶん殴った。

ズンツツツ!!!

レッドの拳が鬼の腹に突き刺さった。  
「が……あつ……!？」

鬼が崩れ落ちる。

そしてその巨体が粒子となって消えていく。

ボシユウウウウ……

「何だあ？消えちまったぞ、オイ？」

「召喚された鬼は致命傷を与えると、その身は還されるのだ。そんな事も知らんのか？」

レッドが不思議そうにしていると、少女が答えた。

「まあいい、それよりも、見ない顔だが、ジジイの差し金か？」

「あん？ジジイ？誰のことだ？」

「ん？違うのか？」

「ああ、俺達はなんつか、あー……、迷子ってやつだ……」

「……本気で言っているのか？待て、俺『達』？仲間がいるのか？」

「……仲間つつーか、連れつつーか、まああと一人だな。おいヴ  
アンプ！出てきていーぞ!!」

近くから出てきたヴアンプ。レッドからバイクを預かって待機していたのだ。

「はあゝい！もう忘れられてるかと思いましたがよゝ！」

「お前はともかく、バイクを忘れるかよ。」

「ヒ、ヒドイ……。」

「で、迷子と言ったが二人ともここがどこか知らんのだな？」

「ああ、さっぱりだ。」

「ワタシ達二人は気がついたらあっちに倒れてたんです。」

「ああ、乗ってたバイクもブツ壊れちまつてるしな……。」

「ふむ……（嘘をついてる様には見えんな……。）」

二人の様子を黙っていた少女が口を開く。

「わかった、ここの責任者の所まで案内してやろう。どの道ここでは部外者は動きづらいからな、先に会っておいた方が何かと都合がいいからな。」

少女の提案に二人は明るくなる。

「おお、悪いな。助かるわ。」

「でもお嬢ちゃんがこんな時間に一人で出歩くのはどうかと思うんです、ワタシ。」

……ピキッ！

「……ん？どうした？」

固まってしまった少女を不思議そうに見るレッド。

「どうしたの？お嬢ちゃん？」

心配そうに少女に声をかけるヴァンプ。

ぷるぷるぷる……

「……お、おい……？」

「だ、誰が少女かーっつ！？」

少女は地団駄を踏みながら言う。

「私は！エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！！6000年を

生きる真祖の吸血鬼！闇の福音！なんだぞ！！」

いきなり怒り始めた少女・・・エヴァンジェリンに少し驚いたレツドとヴァンプ。

「お、おお。ほら、謝つとけよヴァンプ！」

「年上だったんですね・・・、無礼な態度で申し訳ありません。」  
深々と頭を下げるヴァンプ。

「フ、フン！わかればいいんだ！わかれば！」

すんなり謝罪されるとは思ってなかったエヴァンジェリンの方が面食らう。

「あゝ、それじゃあエヴァンジェリン？そろそろ案内してくれねえか？」

「あ、ああ、そうだったな。すこし待て。こっちの連れとも合流したい。」

そういつて念話で己の従者に語りかける。

『茶々丸、聞こえるか茶々丸？』

数分もしないうちにエヴァンジェリンの連れがやって来た。

・・・空から。

ドドドドドドド・・・！！

緑色の髪をした女の子が、足からジェット噴射しながら降りてきた。

## F i g h t . 0 1 (後書き)

これより先は、マイペースに投稿していく予定です。

1 1 / 1 修正

## F i g h t ・ 0 2 (前書き)

こんな駄文をお気に入り登録していただけたらとは！

感謝感激です！

がんばって週一以上のペースでがんばりたいと思います！

それでは、どうぞ！

## F i g h t . 0 2

眩い光に包まれた二人の行き着いた先は、生い茂る森。  
現れたのは大きな異形・鬼・

鬼に襲われている少女を助けたレッド。

この少女との出会いが物語を動かし始める。

- F i g h t . 0 2 -

「ご無事ですか！？マスター！」

空からやってきた緑色の髪をした少女が己が主の元に駆け寄る。

「うむ、問題ない。お前こそ大丈夫だったか？」

「はい、損傷率2%以下。問題ありません。」

「そうか、・・・ん？どうした？呆けた顔をしておって。」

エヴァンジェリンが呆然としてるレッドとヴァンプに声をかける。

「紹介しよう、我が従者の茶々丸だ。」

「初めまして、絡繰 茶々丸と申します。以後お見知りおきを。」

丁寧にお辞儀をする茶々丸。

「これはこれはご丁寧に。ワタシはヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「さて、レッドにヴァンプよ。そろそろジジイの元へ行こうではないか。先ほどの礼だ、案内してやろう。光栄に思うがいい。」

「へーへー……。まあ、頼むわ。右も左もわかんねーからな。」

四人（三人と一体？）と一台は夜の森を歩く。

今までの経緯をヴァンプが茶々丸に説明し終えた所で雑談し始めた。

「へー、じゃあ茶々丸さんはロボットなの？」

「はい、ヴァンプ様。」

「うふふ、様なんて付けなくていいよ。」

「了解しました。ではヴァンプさんと。先ほどの問いですが、私はロボット・・・女性型ですのでガイノイドです。」

「へえー、すごいですねえ、レッドさん。」

「ふっ、そうだな、お前の所のプラモデルロボとは比べられねえな？」

「もー！またそうやって意地悪なことを言っただからー！」

そうこうしてる内に森を抜ける。

眼前に広がるヨーロッパ調の街並みに、二人は呆然となる。

「・・・日本じゃねーのか？」

「どどどどうしましょうレッドさん！ワタシ！パスポートとか持ってませんよ！逮捕とかされちゃうんでしょっか！？」

「・・・俺だつて持ってねえよ！」

「困ります、ワタシ！」

そんな二人を怪訝な表情で見るエヴァンジェリン。

「オイ、本気で言っているのか？ここ、麻帆良は日本だろうが。それも国内最大級の学園都市として有名だろうが。麻帆良という名前位聞いたことがあるだろう？」

「……は？麻帆良……？」

二人は間の抜けた声をあげる。

「……フム、茶々丸。」

「ハイ、ここ麻帆良学園は明治中期に創設され、初等部、中等部、高等部、大学部や研究施設などの学術機関の総称です。一帯には各学校が複数ずつ存在し、敷地面積はとても広大です。また、学生寮や神社や商店街などの都市機能も併せ持っており、学術機関と併せて麻帆良学園都市と呼ばれています。各分野にて様々な功績を挙げている機関も多いので麻帆良という名前を一度は耳にしたことがあると思うのですが……。」

「……聞いたことあるか？ヴァンプ。」

「いいえ、それにウチの埼玉支部の知り合いからも聞いたことはありません……。」

「………。」

沈黙する二人。

先頭を歩いていたエヴァンジェリンが振り返って沈黙を破る。

「まあいい、その辺の議論は後だ。着いたぞ。」

エヴァンジェリンの背後には巨大な建物。どうやら校舎の様だ。バイクを脇に停め、中に入る一行。

「ここだ。」

一際大きな扉の前で止まる一行。学園長室と書かれている。

その大きな扉を遠慮なく蹴破るエヴァンジェリン。

ドバーーン！！

「ひよっ!？」

中から響く老人の声。

「オイ!ジジイ!身元不明者二名、連れてきてやったぞ!!」

「身元不明って・・・。」

「・・・まあ、怪しいわな・・・。」

呻きながらも入室するヴァンプとレッド。そして茶々丸。

「もう少し静かに入ってくれんかのう・・・。」

「なぜ私がジジイを気遣わねばなんのだ!」

エヴァンジェリンと話しているのは、異様に後頭部が長い老人であった。

老人は入室してきた三人に気がつく、自分の椅子に深く腰かけ直した。

「では、客人方に改めて自己紹介しようかの。ワシが、この麻帆良学園及び関東魔法協会理事会の長をやっておる、近衛 近右衛門と申す。」

「まあ!これはこれは、ワタシはヴァンプと申します。」

「・・・レッドだ。」

「もう!レッドさんっ!またそんなぶつきらばうに!だからよく誤解されるつかよ子さん心配してましたよ!」

「うるせえよ!お前にや関係ねえだろーが!」

ギャーギャー言い争い始めた二人。

「あー・・・、そろそろいいかの?」

学園長が割って入る。

「・・・っと、悪いなじいさん。」

バツの悪そうなレッド。

「ほっほっ、構わんよ。では単刀直入に訊こう。主らは何用でこの麻帆良に参った？」

先ほどまでの飄々とした雰囲気は既に無い。

老いてなお、関東及び学園最強の魔法使いが放つ殺気が部屋を覆っていた。

返答次第では・・・、そう告げるかの如くの重圧。

しかし、その重圧を真正面から受けていながら平然な調子で言いにくそうにレッドが告げる。

「わかんねえんだよ、マジで・・・。」

「・・・は？」

部屋を覆う重圧が霧散する。

「ほ、本当かね・・・？」

場がなんとも言えない空気になってしまい、困った様子の学園長。

そこに、今までだんまりを決め込んでいたエヴァンジェリンが割って入る。

「嘘はついてないだろう。こいつ等はそもそも麻帆良自体を知らない様だ。」

「ふむ、二人が麻帆良に来た時のことを詳しく教えてくれんかの？」  
学園長は判断材料を少しでも増やす為にレッドに更なる説明を求める。

「ああ・・・。」

そう言つてレッドは事の経緯を話し始める。

神奈川県川崎にて、久方ぶりにバイクに乗ったこと。仕方なく二人乗りしたこと。

かなりのスピードを出していた際に点滅していた用途不明なボタンを押したこと。

ボタンを押した途端、眩い光に包まれて気がついたら、ここの森に二人で倒れてたこと。

「んで、途方に暮れてたところで何か物騒な音が聞こえてきてよ。その場所に向かったんだ。

そしたらそのエヴァンジェリンがよ、でけえ鬼？みてえなのに襲われてたからよお、助けたんだ。」

「ふむふむ、なるほどのう……。」

話を吟味する学園長。

「ジジイ。」

「ほ？」

熟考している学園長に話しかけるエヴァンジェリン。

「ジジイ、こいつ等に危険はないさ。」

「何故じゃ？」

「こいつ等はここが麻帆良であるという事も、麻帆良がどういう土地なのか、どんな物があるかわかっちゃいない。そんな間抜けな侵入者など聞いたこともないだろう？」

「ふむ……。」

しかし学園長とて、組織の長。はいそーですか、とはいかないものである。

「ここからは、私の推論だ。確証もないがいいか？」

「ふむ、聞こうかの。」

「こいつ等について、不可解な点が三つある。」

そう言いながらエヴァンジェリンは人差し指を突き立てる。

「一つ、ここに来るまでに聞いた、こいつ等の周りの環境・常識。600年を生きた私でさえ聞いたことがないことばかりだった。」  
エヴァンジェリンは続ける。

二人がいる世界は、まるでTVの様な平和を守るヒーローと怪人の構図、世界に存在する数々のヒーローと悪の組織、ヒーローと怪人が当たり前に生活する世界。

「二つ、こいつ・・・レッドは相当強い。それこそこの私ですら底が見えんほどに。表だろぅが裏世界だろぅが、ここまで腕の立つ男が、このナリで全くの無名というのがありえん。」

茶々丸が主の言葉を補足するべく言葉を続ける。

「話の中で出てきた組織名、人物、お二人様ご本人の情報を検索した結果、通常のネット及びまほネット

での検索結果は0件でした。」

「三つ、おそらく事の発端であろうこいつ等の持ってきたバイク。

魔力でも気でもない気でもない、未知の『力』の残滓を感じた。あのバイクにある何かしらの装置が作動したのは間違いないだろぅ。」

「軽くスキャンしてみました、バイク自体はほとんど異常がみられませんでした。ただし一箇所、大破している装置を発見しました。全体的に魔法技術が使われていないだろうと思われれます。破損状態からみて、装置の起動は不可能かと思われれます。」

「以上から私は、こいつ等が所謂異世界又は平行世界から来たと推測する。」

「ふむ・・・、異世界のう・・・。」

学園長は推論を聞き終え、椅子に深く座り直して考える。

そして、再び口を開く。

「ワシからいくつか質問をしたい。いいかの？」  
うなずく二人。

「まず、本当にここにきた原因は判らんのじゃな？」

「・・・ああ。」

「はい・・・。」

落ち込み気味の二人。

「そのバイクの修理は出来るのかの？」

「具合見てねえからナンとも言えねえが、難しいんじゃないか？」

「腕つぶしに自信はあるんじゃない？」

「まあな。」

「レッドさんは本当に凄く強いんですよ。」

「その力、弱きものに向けるか？」

今までで一番鋭い眼光の学園長。

「しねーよ。俺はヒーローだぜ？」

「そうですよ！レッドさんはそんなことしませんよ！」

ブンブン！と怒るヴァンプ。

「最後に、衣食住とバイクの修理、当てはあるかの？」

「・・・どっちもねえなあ。」

「どうしましょ・・・。」

わずかな沈黙。

「・・・あい、わかった！どうじやろう、バイクの修理が出来るまでここで働いてみんか？勿論、衣食住とバイクの修理が出来そうな者も紹介しよう。どうじゃ？」

「そりゃ有難てえけどよ。」

「ええ、本当に！」

学園長の提案に喜びを隠せない二人。

「今すぐ用意できる仕事は、警備員と指導員じゃ。これには相応の腕っぷしが必要じゃから、レッド殿向けじゃのう。ヴァンプ殿は何か得意な物はあるかの？」

「そうですね、お料理かな？」

「コイツ、料理だけはスゲェんだよ。（しかし、悪の幹部が一番最初に思いつく特技が料理って・・・。）」

「ほっほっほ、ならば店でも開いてみますかな？ヴァンプ殿。」

「ええ！？ほ、ほんとに！？」

「お、いーじゃねーか。ヴァンプ、やってみるよ」

驚くヴァンプに、はやし立てるレッド。

「い、いいんですか？実は少しやってみたかったんです。」

「ほっほっほ、では、明日までに必要な書類や手はずを整えておくで。悪いんじゃが、昼前にもう一度ここに来てもらえるかの。ヴァンプ殿、悪いんじゃが明日の昼食をテストとさせてもらうでの。

機材や食材はこちらで用意するので、心の準備はしておくようにの？」

「は、はいいゝ！」

やや緊張するヴァンプ。

「では最後に、今晚二人が泊まる所じゃが・・・」

「おい、ジジイ。」

黙っていたエヴァンジェリンが口を開く。

「今晚は我が家で預かってやろう。」

「ほ？どつという風の吹き回しじゃ？」

「フン・・・、ジジイには関係ないことだ。話が終わったなら、もう連れていくぞ？」

「うむ、今日はもういいじゃろ。」

「ジャマしたなジジイ。行くぞ二人とも。」

ソファから身を起こし、部屋の出口に向かうエヴァンジェリン。

「それでは失礼します、学園長。」

主の後を追う茶々丸。

「お邪魔しました。また明日。」

お辞儀して退出するヴァンプ。

「じゃーな。」

手をひらひらさせながら退出するレッド。

こうして四人は、この地の最高権力者の部屋を後にした。

突然の来客がいなくなり、静寂が訪れた室内。

「ふむ……、異世界からの来訪者……のう。」

そう言い、机の引き出しから一枚の札を取り出す。

「悪いのう、エヴァや……。」

そして太陽はこの地、麻帆良を照らし始める。

## Fight・02（後書き）

誤字脱字等ありましたら、ご指摘下さいませ！

2011/11/1修正

## F i g h t ・ 0 3 (前書き)

こんな小説に2、600アクセス&amp;600PVも！

感謝です！皆さんに言いたい！ありがとう！そして、ありがとう！

これからもがんばっていきますよー！！

## F i g h t . 0 3

森で助けた少女、エヴァンジェリンと茶々丸。

二人の案内でこの地、麻帆良の最高責任者と出会ったレッドとヴァンプ。

学園長の提案により、レッドは警備員兼指導員、ヴァンプは料理屋をやることに。

今日の宿を提供するというエヴァ。

一行はエヴァの家に向かうこととなった。

- F i g h t . 0 3 -

学園長室を出た四人はそのまま学校も後にする。

レッドとヴァンプの足取りは軽い。

少なくとも当面の生活の不安が解消されそうだからだ。

そして今晚お世話になるエヴァンジェリン宅に向かう四人と一台。

「しかしよお、エヴァンジェリン。いいのか？世話になって。そりやまあ有難てえけどよお。」

「エヴァだ・・・。」

呟くように言うエヴァンジェリン。

「あん・・・？」

声小さくて聞きなおすレッド。

「っ！エヴァでいいと言ったんだ！」

「お、おう・・・。」

怒鳴りちらすエヴァに、若干引き気味のレッド。

「光栄に思っただな！フンッ！」

顔を赤くしてそっぽを向くエヴァ。

「照れ隠しされている所、申し訳ありませんマスター。」

「っ！誰が照れているだど！ええい！このボケロボ！巻いてやる！」

「あああ、いけませんっ！？マスター！そんな乱暴に巻かれてはっ・・・！」

どこからか取り出したゼンマイを茶々丸の頭に突き刺し、グリグリ回すエヴァ。

いきなりの展開についていけず、啞然とするレッドとヴァンプ。

しばらくして落ち着いたエヴァと茶々丸。

「で？一体何の話だ？茶々丸よ。」

「ハイ、レッドさんのバイクのことで提案があるのですが。」

「ふむ？言ってみる。」

「はい、超に相談してみるのは如何かと思ひまして。」

「・・・なるほど、いい案だな。明日にでも連絡を入れておけ。」

「了解です、マスター。」

トントン拍子に話を進めるエヴァ達。

「オイ、その超つてのは誰なんだ？流石に信用出来ねえヤツには触らせたくねえぞ？」

そこに割って入るレッド。

「ああ、まあ信用出来るんじゃないか？」

「はい、超は私の製造者です。他所よりも圧倒的に技術レベルの高い麻帆良においても更に高い技術力を持っており、『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれています。」

「なんだか凄そうですねえ。その人なら直してくれるかもしれませんね！」

そうこうしている間に、森の中の少し開けた所に出た四人。そこには二階建ての立派なログハウスがあった。

「着いたぞ、これが我が家だ。」  
そういつて家の中に入っていくエヴァ。

ログハウスを見上げているヴァンプと、邪魔にならないよう隅にバイクを停めるレッド。

玄関を見ると茶々丸が客人二人を待っている。

「ようこそおいで下さいました。中へどうぞ。」

中に入るように促される二人。

「夜分遅くに失礼します。」

「邪魔するぜ。」

レッドとヴァンプが中に入って目に入ってきたのは、いたる所に置かれたアンティーク人形。

見渡す限りの人形、人形、人形。

大勢の人形を呆然と眺めている二人に茶々丸が声をかける。

「お茶の用意が整うまで、少々お待ちくださいませ。」

ぺこりとお辞儀をし、準備の為に台所に引込む茶々丸。

「あ、お構いなく。」

気を遣うヴァンプ。周りを再度を見回してレッドに話かける。

「しかし・・・、凄い数のお人形さんですね、レッドさん。」

「おお、どれもこれも凄え凝ってんなあ・・・。ん？」

そう言いつつ、一体の人形に目を惹かれるレッド。

他のフリルドレスなどの豪華な見た目の人形と違い、黒のワンピースにカチューシャとシンプルな格好。

背中には可愛い小悪魔みたいな小さな羽根がついている。顔はどことなく茶々丸を幼くした様な顔立ち。この人形だけ、他のとは存在感が違うと感じたレッドは人形を手にとってみる。

「何ジロジロ見テンダ？斬り刻マレテーノカ？」

人形が喋った。

しかもとんでもなく物騒なことを言い放った。  
普通なら絶叫物だが・・・。

「あん？やれんのか？」

しかしレッドは何でも無いように言い返す。

「ええゝ・・・。」

横で見ていたヴァンプも呆れてしまう。

「ケケケ、イイ反応スルジャネーカ。気二入ッタぜ、赤イノ！」

「オメーもいい殺気飛ばすじゃねーか、緑の。」

物騒な友情を結んでいる一人と一体に、呆然とするヴァンプの後ろから茶々丸が声をかける。

「お待たせしました。お茶が入りましたので、どうぞこちらへ。」

リビングのテーブルに促されて、席につく二人。

「オイ、妹ヨ。オレモソッチニヤツテクレヨ。」

「はい、姉さん。」

「フリーナ。」

そう言い、喋る人形をテーブルに備え付けてある小さな椅子に座らせる。どうやら定位置の様だ。

「その小さなお人形さんが、茶々丸さんのお姉さんなんですか？」

と不思議そうに尋ねるヴァンプ。

「ええ、マスターの初代従者のチャチャゼロ姉さんです。姉さん、こちらはレッドさんにヴァンプさん。故あって、今晚お泊めすることになりました。」

洗練された動作でお茶をカップに注ぎながら答える茶々丸。

「オウ、チャチャゼロダ！ヨロシクナ！」

「はい、よろしく。」

「・・・おい、オメーは自分で動けねえのか？」

「はい。姉さんは今、とある事情で自力による活動は出来ません。」

「ふーん・・・。」

「忌々しい呪いのせいだな。」

背後からした声にレッドとヴァンプが振り返ると、階段から着替えを済ましたエヴァが降りてきた。

「チャチャゼロは私の魔力で動くんだが、今の私は魔力を封印されていてな。そのせいで自由に動けないのさ。」

思い出してイライラしたのか、やや乱暴に椅子に座るエヴァ。

黙って主にお茶を差し出す茶々丸。

そのお茶を優雅に口に運ぶエヴァ。その所作は非常に美しく、一枚の絵画の様だ。

「シカシ、アノ御主人ガ他人ヲ泊メルトハナ。気ニ入ッタノカ？」

「ぶう~~~~つつつ!？」

・・・訂正。お茶と共に、漂っていた優雅さが木っ端微塵に吹き飛んだ。

「ゲホッ！ゲホッ!？・・・何を言う！チャチャゼロ!？」

咽るエヴァに黙ってタオルを差し出す茶々丸。メイドの鑑である。

「ダツテヨ？他人ヲ泊メルナンテ初メテノコトダシナ。」

「っ！？か、借りを返したただけだ！深い意味はない！！」

ギヤーギヤー騒ぐ主従を他所に、お茶談義するヴァンプと茶々丸。我関せず、と黙々とお茶を飲むレッド。

窓の外を見ていたレッドが立ち上がる。何か無いかとポケットに手を入れると、出てきたのはパチンコ玉。転移前に行っていたパチンコ店のものである。

・・・ガラッ。

急に窓を開けたレッドに全員が注目する。

「・・・気に食わねえな。こういうのはよ・・・。」

手にしていたパチンコ玉を・・・

チュインッ！

親指で弾き飛ばす。  
指弾である。

結果も確認せず、窓を閉めて席に戻るレッド。

「おい、レッド。先刻のは一体、何を撃った？」  
興味深々に聞いてくるエヴァ。

「あん？何って・・・、学校からここまでずっと後を着いて来てた何かだよ。道中迷わないようにとかで監視してんなら別に構わねえが、ずっと家の中まで監視してやがったからな。気に食わねえからよ、警告の意味も含めて威嚇しただけだ・・・。」

「・・・・・・・・。」

エヴァは驚愕した。

自分も気づかなかった、監視の目をいともたやすく看破したこと。そして、察知からの迅速な対応に。

恐らくその監視はジジイによるものだろう。ならば自分が気づけない様な監視を用意することも出来ただろう。だが、レッドは気づいた。その事実にとっても興味が湧いてきた。コイツはどれほど強いのだろう・・・・・・・・と。

一方、レッドは急に黙り込んだエヴァを見て、不安を覚える。

「・・・・・・・・マズかったか？」

「そうですね！レッドさん！いきなり暴力はマズいですよー！！」  
ヴァンプの正論に更に焦るレッド。

「・・・・・・・・おい？エヴァ？」

「・・・・・・・・ふふふ、面白い・・・・・・・・。」

小さく呟くエヴァ。

「あん？おい、エヴァ・・・・・・・・？」

「茶々丸！別荘を用意しろ！！コイツの強さに興味が湧いた！」

「Yes、マスター。」

そう言い、地下へ消える茶々丸。

「オホ！楽シソウジャーカ、御主人。オレモマゼロヨ！」

「くくく、いいだろう。レッド！ヴァンプ！ついてこい！面白い物

を見せてやろう!」

「?」

急にテンション上げっぱなしのエヴァに置いてかれてる二人。

一行は家の地下室に降り立った。

そこには大きなガラス球を設置している茶々丸の姿があった。

「準備出来ました、マスター。」

「うむ、ご苦労。」

大きなガラス球を覗き込むレッド達。その中にはお城と海が見える。

「なんだ? 模型? ジオラマか?」

「凝ってて凄い綺麗ですね!」

「おい、二人とも。この円の中に立て。」

言われるままにガラス球の正面の魔法陣の中に立つ二人。

そこにエヴァ、チャチャゼロを抱いた茶々丸が加わり、エヴァがガラス球のボタンを押す。

ポチッ

「ククク・・・、存分に驚くがいい!」

足元に魔法陣が輝き、眩い光が溢れる。

・・・カッ!!

光が収まると・・・

レッドとヴァンプの眼前には、大きく立派な城と南国の海が広がっ

て  
い  
た。

## F i g h t ・ 0 3 (後書き)

感想・ご指摘・ご提案、お待ちしております！

## F i g h t . 0 4 (前書き)

祝！5000PV1000アクセス突発！

皆さん、ありがとうございます！

このような駄文ではありますが、より一層頑張っていきたいと思  
います！

今回、少しでも戦闘描写があります。

それではどうぞ！

## F i g h t . 0 4

たどり着いたのは一軒の立派なログハウス。

そこでエヴァの初代従者チャチャゼロと出会う。

レッドの実力の一端を垣間見たエヴァは、好奇心を抱く。

そして別荘と呼ばれる大きなガラス球を引っ張り出してきた。

そして光に包まれた一行。

- F i g h t . 0 5 -

不思議なガラス球の前に立っていたはずなのに、目の前に広がるのは石造りの大きな広場。

今居る、小さな足場と繋がっている唯一の建造物。それ以外に見えるのは空のみ。

繋がっている通路には柵はおろか、手すりすら付いておらず相当怖い。

「どうだ？この空間は、外での一時間が一日になる。私は別荘と呼んでいる。ここなら監視の目はないし、自由に振舞えるのだ。」

フフン、と自慢げなエヴァ。

「付いて来い。」

そう言い、エヴァはずんずんと進んでいく。その後をすたすた着いていくレッド。

「ひ、ひええええ……。ち、ちょっと待ってくださいよぉ〜！」

顔を真っ青にして腰が引けているヴァンプは、生まれたての子鹿のようにぴるぴるとしか進めない。

しかし、先頭の二人は待つてくれない。

足元しか見れないヴァンプに影が差し掛かる。

「？」

その影に気づいたヴァンプは顔を上げた。

「ヴァンプさん、お手を。」

「ケケケ、情ケネーナ。」

そこにいたのは茶々丸とチャチャゼロ。

「ち、茶々丸さん……。」「

ジン……。

優しき少女に感動しながら手をとるヴァンプ。

「ありがとね〜。」「

茶々丸のエスコートで何とか渡りきったヴァンプ。所要時間おおよそ一時間。

そのまま、茶々丸の案内で広場地下にある部屋に案内される。

部屋には既に先行していた二人が寛いでいた。

床には既に数本の酒瓶が転がっている。

「遅かったな、茶々丸。」

「ヴァンプがヘタレだからな、仕方ねーよ。」

見捨てていった上にあんまりな言われようにな垂れるヴァンプ。

「オ！オレモ混ぜロヨ！」

そう言い、茶々丸の腕から降りて自分で酒瓶を開けるチャチャゼロ。そんなチャチャゼロを見て、レッドは疑問を口にする。

「……ん？自分で動けんのかよ？」

「ここは通常空間より魔力が満ちているからな。私も多少の力の行使が出来る。」

「フーン……、そんなもんか。」

「ねえねえ、エヴァちゃん！」

二人の会話に割ってはいるヴァンプ。

「誰がエヴァちゃんだ！私は600歳だと言っているだろう！！」

「まあまあ、エヴァちゃん。それよりワタシ、魔法が見てみたいの！魔法が……！」

「諦める、エヴァ。コイツには何言ったって聞きやしねえんだよ。」  
ちゃん付けに怒り心頭のエヴァに、キラキラした目で見つめるヴァンプ。

激しく同情するレッド。

「チツ！……ん？いいだろう！魔法だな？ククツ、存分に見せてやろうじゃないか。」

苛立った顔から一転、妖しい笑みを浮かべる。  
そう言うときエヴァはパチンと指を鳴らす。

「チャチャゼロ！茶々丸！準備しろ！！」

「了解しました、マスター。」

「ケケケ、久シブリダゼ！」

早速準備に取り掛かる従者二人。

「お前らはこっちだ。」

エヴァに案内され、先ほどまでいた建物の前にある大広場へと出た。

「準備完了しました。」

「待タセタナ、ケケケケケ。」

しばらくすると準備を終えた従者二人がやって来た。

茶々丸はメイド服から、動きやすそうな服に着替えている。

チャチャゼロは、自分の身の丈ほどもある大振りのナイフを両手に持っている。

「・・・い、一体何の準備を？」

「フフフ、ちょっとした余興さ。お前の望み通り、魔法を見せてやるさ・・・。」

ヴァンプの問いに、エヴァは楽しそうに闇夜の如く漆黒のマントを翻す。

「ただ魔法を見せるだけではつまらん。そこでレッドよ、どうだ？  
ちょっとした力試しをしようじゃあないか。」

「あん？力試しだ？」

「そうだ、貴様と私で模擬戦を行うんだよ。」

「あー・・・、そういう事かよ・・・。」

楽しそうに提案してくるエヴァに、今ひとつ乗り気でないレッド。

「ええっ！？危ないですよー！！」

「何だ？お前は魔法が見たい、私はレッドの実力が知りたい。どうだ？実にシンプルなギブ&amp;テイクじゃないか。悪の魔法使いに無償で、何かしてもらえと思うなよ？」

模擬戦と聞いて慌てるヴァンプに、とてもいい笑顔のエヴァ。

「はあ、しゃゝねえなあ・・・。」

そう言い、広場中央に向かうレッド。

その後を続くエヴァ、茶々丸、チャチャゼロ。

「あん？エヴァだけじゃねーのか？」

「私は本来後衛型の魔法使いだからな。前衛に従者を配置するのが本来のスタイルなのさ。どうした？3対1は不満か？」

「別に問題ねーよ。」

ゴキゴキと首を鳴らしながら言うレッド。

「ククツ、大した自信だな。だが、そうでなければ面白くない。」

楽しそうに笑顔を浮かべ、ゆっくりと浮遊していくエヴァ。

「よろしくお願いします。」

「ケケケ、早く殺ローゼ！モウ我慢出来ネーゼ！」

お辞儀する茶々丸と、待ちきれない様子のチャチャゼロ。

「ククツ、精々楽しませてくれよ？レッド。・・・オイ！ヴァンプ  
！」

「・・・ハ！ハイッ！？」

急に呼ばれて驚くヴァンプ。

「合図を出せ！始めるぞ！！」

そう言われ、大きく息を吸い込むヴァンプ。

この後、発せられるであろう合図。それに合わせた初動を行う為に  
集中する三人。

「えっと・・・、始めてくださいーい！！」

あんまりにも気の抜けた合図だった為、空中でエヴァがこけた。

「あんのバカ・・・」

レッドも脱力した。

しかし、そんな空気を意に介さず躍り出る二つの影。

ヒュボツッ！！

「レッドさん、失礼します。」

丁寧な挨拶と共に小手調べの突きを繰り出す茶々丸。  
シャッツ！！

「ケケケ、スグニ終ワルンジャーネーゼ？」

大振りのナイフを首を刈り取らんばかりの鋭き一閃するチャチャゼ  
口。

「・・・はあ。」

気だるそうに二人の攻撃を避け、捌くレッド。

そのまま2対1の接近戦に突入する三者。

絶妙なコンビネーションの茶々丸とチャチャゼ口。

「・・・ええい！そのまま抑えておけよ！リク・ラク・ラ・ライラ  
ツク！」

気を取り直したエヴァが従者二人に指示を飛ばしながら呪文詠唱の  
為、始動キーを唱える。

その間も茶々丸のパンチが蹴りが、チャチャゼロの大小二振りのナ  
イフが、常に同時に振るわれ続ける。

しかし、レッドは気だるそうなまま捌き続ける。  
続けている内に茶々丸が違和感を覚える。

「何故、反撃されないのですか？」

攻撃姿勢はそのままに茶々丸はレッドに問う。

「ん・・・。」

ポリポリ・・・。

レッドは頬を掻きながらも茶々丸の攻撃は避け、チャチャゼロのナイフは捌く。

そこに二人にエヴァから念話が入る。

（もういい、二人とも下がって待機だ。）

「・・・っ！姉さん！」

「チッ！モット楽シミテーノニヨ！」

従者二人が距離を取る。

後方のエヴァが呪文を紡ぎ・・・、

「氷の精霊17頭 集い来りて敵を切り裂け！」

キンキンキン！

17の氷の矢がエヴァの周りに形成される。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！！」  
・・・解き放つ！

魔法を撃ったエヴァは追撃はせずに様子を見る。  
（・・・さあレッド、一体どう出る？）

17の氷の矢がレッドに迫る。

ドキュキュキュキュ！

「・・・オイオイ、初めての魔法だっつーのに・・・。」

初めて見る魔法に多少面食らいつつも冷静に観察する。

（氷を撃ち出すだけ・・・か？まずは・・・無難に回避か？）

余裕を持って回避するレッド。

それを見ていたエヴァは魔法の射手に追尾を命ず。

通過した魔法の射手が通過した後、弧を描き戻ってくるのを見たレッドは迎撃を選択。

（・・・チツ！やっぱ追尾できんのかよ！仕方ねえなあ！迎撃つ！）

レッドは腰を落とし、迎撃体勢を取る。

一連の動きを見ていたエヴァはレッドを値踏みする。

（格闘戦は上々、状況判断能力も中々。さて・・・、どう迎撃するつもりだ？ククツ、面白い物を見せてくれよ？レッド。）

レッドは脚を石畳に向けて、踏み抜く！

捲れあがった石畳の破片を拳で撃ちだし、魔法の射手にぶつけ、相殺していく。

ボツ！ボボボツ！

レッドの身に迫る魔法の射手は4発までになっていた。

残り4発の魔法の射手に向けて、掌をかざす！

すると、その掌がみるみる高熱を帯びていくのをエヴァは見逃さなかった。

その高熱を帯びた掌で魔法の射手を相殺していくレッド。

「ふむ、今日はこれ位にしてやろう。」

レッドが綺麗に魔法を相殺したのを見たエヴァが降下しながら言う。それに合わせて従者二人も戻ってきた。

「今撃った魔法が、『魔法の射手』。最もオーソドックスな攻撃魔法さ。どうだった？二人とも。初級とはいえ、初めて見て、体験した魔法は？」

「ちょっとビックリしちゃいましたけど、綺麗でした〜！」

と、やや興奮気味のヴァンプ。

「ん？まああれくらいならどーってこたねえな。ただ、初級っていう位なんだから、中級や上級ってのもあんだろ？」

そして、戦う者であるが為の更に上級魔法を警戒するレッド。

「まあ、その辺は追々だな。戻って晩酌とでも洒落込もうではないか？」

そう言い、建物に向かうエヴァに皆は着いて行くのであった。その晩酌で振舞われるのは、ヴァンプと茶々丸の特製ツマミの数々。エヴァはヴァンプの腕前に驚きつつも、満足そうに舌鼓を打った。酒が進み、ヴァンプは早々にダウン。残ったエヴァ、チャチャゼロ、レッドはのんびりと酒を楽しむ。

「相変わらず弱えなあ、ヴァンプは・・・。」

「ふむ、ところでレッドよ？先ほどの模擬戦で気になっていたのが・・・。」

「あん？何がだ？」

「なぜ開始直後の格闘戦で、防戦しかなかったのだ？あれだけの身のこなし、二人を倒すことは容易かった筈だぞ？」

「ソーダゼ！アンナ簡単ニアシライヤガッテ！」

「・・・ハッ！決まってるだろ？簡単な事じゃねーか。」

「・・・？」

怪訝な表情のエヴァ。それに対し、さも当然とばかりのレッド。

「俺はヒーローだぜ？女子供を殴れる訳ねーだろーが？」

「・・・クッ！アハハハハ！この闇の福音を！その従者を！女子供とはな！！アハハハハ！」

（コイツは本当に面白い！しばらくは退屈しないですみそうだな！）

こうして酒宴は更に盛り上がり、夜も更けていった。

## F i g h t . 0 4 (後書き)

戦闘描写って、こんなに難しいんだって実感しました。そんな今話。まだ作中では1日経ってないんですよね f ( ^ | ^ ;

何とか、一週間に一度の更新は維持！  
もちっと早く作れればいいーのになー！。

## F i g h t ・ 0 5 (前書き)

くっ！生産スピードが上がらない！！  
ストックが全然貯まらない・・・。

それではどうぞ！

## F i g h t . 0 5

別荘にて行われた、エヴァvsレッドの模擬戦。

エヴァはレッドの実力を見る為に、レッドは魔法を知る為に、卓越した格闘技能、状況判断能力を見せるレッド。気をよくしたエヴァが晩酌を始める。

「女子供を殴れるかよ。」

ヒーローとしての矜持をみせたレッド。

ますますレッドを気に入るエヴァ。

酔いつぶれるヴァンプ。

別荘での一夜が明ける。

## - F i g h t . 0 5 -

別荘での一夜が明け、朝を迎える。

一番早く起きたのは、長年の習慣からヴァンプ。

「・・・うーん、朝ごはんの支度しなきゃ・・・。あれ・・・？  
アジトじゃ・・・ない？」

モゾモゾとベッドから這い出るヴァンプ。

起きて目に入ってきたのは、慣れ親しんだ木造二戸建てのアジトの自室ではないことに気づく。

寝ぼけた頭もようやく覚めてきた。

「あ、エヴァちゃん家にお世話になってるんだった。」

お世話になつてゐるならせめて朝食位は自分が用意しようと思ひ立ち、部屋を出る。

二番目に行動を開始したのは茶々丸。

「・・・スリープモード終了。各部オールグリーン。通常モードで起動します。」

起動した茶々丸は朝食の準備を開始するため、待機場所から台所に向かう。

道中、センサーを使って、自分の主、客人に異常がないかを簡潔に確認する。

主と客人の一人はまだ部屋から出ていない…寝ていると判断。もう一人は既に部屋を出ている様だ。

しかし、やたらとウロウロと歩き回っている様子。

「慣れない場所で、迷子になったのかも知れませんね。」

そう判断して迎えに行こうと行動を開始する。

「うつうつ…、どこどこなんだろう？」

意気揚々と部屋を出たヴァンプは、見事に道に迷った。既にさっきの部屋にすら戻れない状態だ。

そもそも、すぐに酔いつぶれて寝てしまったヴァンプは録な案内もされておらず、迷子になるのも当然といえる。

「まだ朝も早いから、エヴァちゃん達を起こすのも気が引けちゃうし…、レッドさんはこんな時間に絶対起きてる訳ないし…。」

早朝に大声を出して誰かに来てもらうのも気が進まない悪の組織の幹部、それがヴァンプ将軍（カリスマ主夫）なのだ！

そんなヴァンプに救いの手が差し伸べられる。

「見つけましたよ、ヴァンプさん。」

「迷子トカ、笑エルゼ！ケケケ！」

茶々丸からは救いと、チャチャゼロからは追い討ちを受ける。

「うつつ、お台所にも部屋にも戻れないで困ってたの！」

「キッチン…ですか？どういったご用件で？」

プリプリと情けない事を言うヴァンプに茶々丸が問う。

「あ、あのね、お世話になっているからさ、せめて朝ごはんでも用意しようと思ったの！」

「そうでしたか、ですが朝食を用意するのは私の仕事ですので。ヴァンプさんはお客さまですので、もてなさないといけません。」

断る茶々丸。しょんぼりするヴァンプ。

「ケケケ、イージャーネーカ妹！一緒二作ツテヤレバ。」

「…わかりました、キッチンまでご案内します。どうぞこちらへ。」

そこに待ったをかけるチャチャゼロ。

それに同意し、キッチンへと歩きだした茶々丸。

「ありがとう！茶々丸ちゃん！」

こうして茶々丸とヴァンプは仲良く朝食の準備に取り掛かった。

「そういえば、エヴァちゃんは好き嫌いはあるの？」

トントントントントン・・・、包丁が心地よいリズムを刻む。

「マスターはニンニクとネギ以外、好き嫌いはありません。」

グツグツグツ・・・、食欲をそそる香りが広がっていく。

「タダシ、カナリノグルメダカラナ。生半可ナ物ヲ出スト、ヘソ曲ゲチマウゼ？ケケケ。」

茶々丸の頭の上で見学してるチャチャゼロが言う。

「じゃあ、気合いれないとね！」

ムン！と気合を入れるヴァンプ。

「・・・そろそろ完成ですね。」

「ジャア、寝ボスケナゴ主人ヲ起コシテ来テヤルカ。」

茶々丸の頭から飛び降り見事な着地を決めるチャチャゼロ。

「あ、じゃあワタシもついていこうかな。道とか覚えたいし。茶々丸ちゃん、あと頼める？」

「あとはお任せください、ヴァンプさん。」

「ヨシ、ジャア着イテ来ナ！オッサン。」

テテテテ・・・と可愛らしい足音で歩きながら先行するチャチャゼロ。

「あ、待つてよー！」

「姉さんも楽しそうでよかった・・・。ヴァンプさん達のお陰ですね。」

そんな二人を微笑みながら見送る茶々丸は、朝食の仕上げにかかる。

「ヤッパリ、レッドノ奴ハ強エンダナ？」

「そりゃあもう！滅茶苦茶強いんだから！お陰でウチの組織、フロシャイムのちつとも世界征服が進まないもの！いっつも配下の子達がボッコボコにされちゃうの！」

ブンブン！そんな音が聞こえてきそうな程、憤慨するヴァンプ。

「オ？オッサン、部下ガインノカ？」

「沢山いるよ？皆良い子ばかりなんだから！」

「怪人トカ、切ツテミテーナア！ケケケ！」

「クッククッククク！我がフロシャイムの精鋭達、簡単にはやられはせんぞ？」

急に悪の幹部モードになるヴァンプ。（普段はただのカリスマ主夫）

そうこうしている内に、レッドの寝ている客室に到着。

「レッドさ〜ん、起きてくださ〜い！」

ドンドン！

．．．．．

．．．。

「返事ガネーナ？ドースル？ヤツチマウカ？」

「ククク、それもよかるう。やれるか？チャチャゼロよ？」

「ケケケ！任せトケ！」

未だ幹部モードのヴァンプに、悪ノリし、愛用の大振りナイフを取り出すチャチャゼロ。この二人、意外といいコンビかもしれない。

カチャ．．．、キイイイ．．．。

出来るだけ静かに扉を開けるヴァンプ。

「失礼しま〜す．．．。」

悪ノリしても礼儀を忘れない。それがヴァンプクオリティ。

「ククク、暢気に寝ておるわ。そのまま永眠となることも知らずに！（注：小声）」

「ケケケ、斬り刻ンデヤルぜ〜！（注：小声）」

「やれいっ！チャチャゼロよ！憎き宿敵サンレッドを抹殺するのだ

「!!」

「ケケケッ!!」

「『やれい!!』じゃねーよっ!!!(怒)」

ガバッ!バサア!ゴッ!!

順番に、レッドが起きた音・シーツをチャチャゼロに被せた音・ヴァンプに拳骨喰らわせた音である。

「ムアー!コノー!離セー!チキショー!」

シーツに包まれたまま、がっちり固定され身動き取れないチャチャゼロ。

そして、頭にタンコブを作り正座させられてるヴァンプ。  
既に説教済みである。

「ううう・・・、すみませんでした。」

「んで?わざわざ、寝込み襲いに来たのか?あん?」

「いえ、朝食の準備が出来たんで起こしにきたんですよ?そしたらノックしてもお返事が無かったもので・・・、つい・・・。」

「そんな軽はずみで人を襲うなよな・・・。」

朝食が出来てるなら待たせる訳にもいかないので、一行はエヴァを  
起こしに行くことに。

「ソコノ部屋ガ、ゴ主人ノ部屋ダゼ。」

コンコンコン・・・。

「エヴァちゃん、朝ごはんですよ。」

「……母親かよ……。」

……ガチャリ。

部屋の主、エヴァが不機嫌そうな顔で出てくる。

「おはよう、エヴァちゃん！朝ごはん出来て！」

「エヴァちゃんって言うなー！！」

ヴァンプの声を遮り、吼えるエヴァ。朝から元気な吸血鬼である。

「まあまあ、朝ごはんが冷めちゃうよ？エヴァちゃん。」

「エヴァ、諦める……。コイツはずつとこんなんだ……。」

「ぐううう！しかし……。！しかし……！」

レッドの声に、納得しきれないエヴァ。

「早く行コーゼ？妹ガ待ッテルゼ？ケケケ！」

「そうそう！朝ごはんが冷めちゃいますよ！」

そう言いヴァンプと共に先に行こうとするチャチャゼロ。  
うな垂れて歩くエヴァに、気だるそうなレッド。

「おはようございます。マスター、レッドさん。」

「うむ。」

「おーっす……。」

「ごめんね、仕上げ任せちゃって。すぐ手伝うから！」

そうして食卓を飾るのは、純和食の朝ごはん。  
ごはん・味噌汁・焼き海苔・玉子焼き・焼き鮭・キンピラゴボウ・  
小松菜のおひたし。

「お？ヴァンプが作ったのか？」

「ええ、お世話になるんで朝食くらいはと思ひまして。」

「おい、エヴァ。期待していーぜ？コイツ、料理だけはスゲーんだよ。」

「ほう？昨日のツマミも中々だった。ならば期待させてもらうつし  
ようか。」

「ホントはヌカ漬けも欲しいとこなんだけどね。ささ、召し上がれ。」

朝食は大好評であつた。

朝食を終えて、食後の一服をしているとエヴァが話し始めた。

「さて、晩まで出られんからな。どうせならもう少しこの世界のこ  
とを学んでおけ。情報や常識がなければ話にならんだろう。お前ら  
の身元は、あまりバレない方が良さそうだから。」

「・・・だな、メンドイけどな。」

「お勉強会ですね？」

「学ぶのは、魔法使い共の文化やら価値観やら、そんなところだろ  
う。余計な衝突を避けるのに必要だろう。」

全員が別の部屋に移動。そこは机と椅子、ホワイトボードだけの簡  
単な教室のような部屋だった。

そこにエヴァがやってきた。教鞭と眼鏡を装備して・・・。

「ふふっ、エヴァちゃん、先生みたいだねー。」

「形から入るタイプか・・・？」

「えゝ、ではこれより授業を始めてやろう。まずは一般的な魔法使い共についてだ。」

「まず、魔法は世間一般には認知されていないのだ。故に、魔法使いは魔法を秘匿する義務がある。バラした奴は魔法使いの組織によって、記憶消去又は、酷いやツはオコジヨにされるらしいぞ？」

「・・・オコジヨ？」

「怖いですねゝ。」

課せられる罰に怪訝な顔のレッド。

ゾツとするヴァンプ。

そこから、麻帆良には沢山の魔法使いがいること、そこまで強いこと、魔法使いの組織が麻帆良にあること、＜偉大な魔法使い＞についてを簡単に教えてくれるエヴァ。

昼食をはさみ、魔法使いのタイプなどの戦闘関連の基礎知識を教わった。

その後、夕食を食べ、外とほぼ同じ時間帯になるのに合わせて、別荘を後にする4人。

パアアアアッ！！

「この一瞬で景色が変わるのが凄いですよねゝ！まさに魔法という感じで！ね！レッドさん！」

「あゝ・・・、はいはい。そーだなー。」

転移に興奮しきりのヴァンプに、呆れ気味のレッド。

エヴァと茶々丸は明日も学校がある為、このまま全員就寝となった。

こうして、迷子のレッドとヴァンプの麻帆良での最初の夜が更けていく。

（別荘で一夜明かしたが・・・。）

こうして、太陽は異郷にて休息を得る。

## Figure 05 (後書き)

誤字脱字がありましたら、お知らせください。

## F i g h t ・ 0 6 (前書き)

1 0 , 0 0 0 P V 2 , 5 0 0 アクセス突発！  
皆さんに言いたい！

ありがとう！そして、ありがとう！

でも、ストックがなくなってしまったorz

## F i g h t . 0 6

別荘での一日を終えたレッドとヴァンプ。

朝食作りを通して仲良くなるヴァンプと茶々丸。

模擬戦を通して、レッドへさらに興味を持つエヴァ。

悪乗りするヴァンプとチャチャゼロに対し、麻帆良に来てついに初の説教（肉体言語込み）を炸裂させるレッド。

ここでの常識を色々と教わるレッドとヴァンプ。

別荘を出て、ようやくレッドとヴァンプが麻帆良に来てからの長い一日が終わるのだった。

- F i g h t . 0 6 -

別荘を出た翌朝、全員でヴァンプと茶々丸の合作の朝食を皆で済ませた。

登校の準備をする為、エヴァと茶々丸は二階の自室へと戻る。

学園長の所に顔を出さなくてはいけないレッドとヴァンプもエヴァ達に着いて行くつもりだが、特に準備はないため、そのままくつろいでいた。

しばらくすると支度を終えた二人が降りてきた。

「待たせたな。」

「お待たせしました。」

「二人とも可愛いね。」

「もう出発すんのか？」

「はい、そろそろ出ませんと通学ラッシュに巻き込まれてしまいます。私たちが向かうのは、女子校エリアですので空いている時間帯

でないとレッドさん達が辛いと思いますので。」

「あゝ・・・、たしかに。キツツいなあ・・・。」

「え？なんですか？」

女子学生のための満員電車に乗るのを想像してゾッとするレッド。  
キョトンとするヴァンプ。

「ウム、それに人混みなぞ嫌だからな。出るぞ。」

「了解です、マスター。」

「あいよー。」

「行つて来るね、チャチャゼロちゃん。」

「ケケケ、迷子ニナンカナンジャネーゾー。」

パタン・・・。

四人はログハウスを後にした。

ログハウスがある森を出て、学園エリアに入る。

学園エリアの一番奥、女子校エリアに向かう。

まだ時間に余裕がある時間帯のせいか、登校している生徒はまだそこまで多くない。

多くは無い生徒達にチラチラとこちらを見ている。

女子校エリアにおいて、明らかに浮いているレッドとヴァンプ。

「・・・予想はしてたがよ・・・。視線がキツいぜ・・・。」

「・・・？どーしたんです？レッドさん？」

「・・・お前の無神経さが羨ましいよ・・・。ハア・・・。」

「ククツ、私たちがいなければ、即通報だったかもな？」

居心地が悪いレッドと、一向に堪えないヴァンプ。

そんな二人を楽しそうに笑うエヴァ。

どうフォローしていいか分からずオロオロする茶々丸。  
そうこうしている内に、麻帆良学園女子中学校に到着。

「ジジイは大概この学長室にいる。ほぼ女子中にのみ腰を据えているからな、変態ではないかと疑っているんだがな？今後用があれば此処に来るがいい。」

「組織のトップが変態なのか？・・・終わってんな。」

エヴァに誤解を植えつけられつつ、玄関ホールを抜けて学長室に向かう。

スーツに眼鏡の男性が学長室から出てきた。

近づいてくるエヴァ達に気づいた男性がこちらにやって来る。

「やあ、エヴァ、茶々丸君。おはよう。」

「フン、タカミチか。」

「おはようございます、高畑先生。」

「エヴァ、そちらの方々が？」

タカミチと呼ばれた男性は人の良さそうな笑みを浮かべる。  
しかし、その温和な笑顔の中に一瞬鋭い視線が混ざる。

「ああ、そうだ。赤い方がサンレッド。紫のがヴァンプだ。」

「始めまして、タカミチ・Ｔ・高畑です。学園長の補佐とエヴァ達のクラスの担任をしています。」

「ほとんど出張ばかりのダメ担任だな。」

「ハハハ・・・耳が痛いね・・・。」

エヴァの皮肉に若干引き攣るタカミチ。

「初めまして、ヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「約束の時間は昼前と聞いてただけど？」

「登校ついでに道案内してやったんだ、感謝しろ。」

「そうだね、麻帆良は大きいから、初めての人は大概迷うだろうしね。助かったよエヴァ。それじゃあ学園長はもう中にいるから、お二人はどうぞ中へ。エヴァ達はそろそろ教室に行くだろ？」

「そうさせてもらう。行くぞ茶々丸。」

「ハイ、マスター。それでは皆さん、失礼します。」

そう言い、エヴァは颯爽と、茶々丸はペコリとお辞儀して去って行った。

「失礼しまゝす。」

「邪魔するぜ。」

「学園長、お二人が到着しました。」

エヴァらと別れたヴァンプ、レッドが学長室に入室する。その後ろにタカミチが続き扉を閉める。

「おうおう、よく来てくれたの。そこに掛けてくだされ。」

学園長の指したソファーに座る二人。

「タカミチ君や、この書類を二人に渡しとくれ。」

「分かりました。」

そう言われて、テーブルに広げられた書類の数々。

「それらの書類は、この学園における身分の証明やらと、レッド殿の広域指導員の資格や、ヴァンプ殿の飲食店営業許可、店の所有権

等などの一式じゃよ。これで麻帆良では身分におけるトラブルは粗方何とか出来るじやろうて。」

「ここまでしてただけるなんて！ありがとうございます！」

（こんな書類、一晩で準備とか出来るもんか・・・？）

脅威の手際を見せ付ける学園長、感激したヴァンプを他所にざっと書類に目を通すレッド。

「・・・ん？じいさんよお。どの書類も名前の箇所が空欄になってんぞ？」

「おうおう、二人の名前を入れにやなんのじゃがな？サンレッドとヴァンプという名前しか聞いておらんの？どうするかお主等に決めてもらおうと思って、空けておいたんじゃ。」

「ナルホドな。日本人みたいな名前じゃなくてもいいのか？」

「構わんよ。ここには外国の人たちも沢山おるでな。そんなに違和感も無かるう。」

「じゃあワタシは・・・、『ヴァンプ』フロシャイム』で！うふふ、格好よくないですか？ワタシ、外国の人みたいな名前に憧れてたんですよね。あ！じゃあレッドさんは『内田 レッド』でいいじゃないですか？かよ子さんも喜ぶますよ！」

「バツ・・・！？オメーツ！？誰がするか！！ってオイ！勝手に書類に記入すんじゃねえええ！？」

普段からは考えられない俊敏さとパワーで勝手に記入するヴァンプ。

「レッド殿・・・？もう一度書類を手配しようかの？」

「・・・イヤ、そこまで世話になんのもワリイからよ・・・。このままでもいいわ。」

「そうか、ならこのまま書類は受理するからの。次は二人の仕事についてじゃが・・・。」

そう言い、傍に控えていたタカミチに目配せする学園長。

「レッドさんの仕事は僕が説明しよう。広域指導員っていうのは簡単に言くと、見回りの先生かな？これだけ大きいとトラブルなんかも結構あつてね。それらに対応するには腕っ節が必要なこともあるんだ。」

「ナルホドな……。自警団みたいなもんか。」

「そーなるかな、後で早速パトロールに行ってもらうから。」

「説明はそれくらいかの？次はヴァンプ殿じゃ。」

「は、はい！」

「この後、簡単な料理を作ってもらい試食させてもらう。それで問題なければ、店になる物件を見てもらうからの？」

「わかりました！お昼ごはんになるものを作りますね？」

「うむ、空いておる調理実習室を押さえてあるので。今から行くかね？」

「あ、献立も決めたいのでその方が嬉しいですね。」

「じゃあ案内の先生が来たら、早速移動しておくれ。今から呼ぶでな。」

「はい。」

早速電話する学園長。

「もしもし？ワシじゃが、そうそう、すぐ来てくれんかの？うむ、頼んだぞい。」

電話も終え、お茶を飲みながら待つこと少し。

コンコン……。ガチャ。

「失礼します、申し訳ありません、お待たせしてしまつて。」

軽くウェーブの掛かった髪の長い眼鏡の美女がやって来た。

「紹介しようかの、こちらは源先生じゃ。」

「はじめまして、源といいます。」

「はじめまして、ワタシはヴァンプと申します。」

「レッドだ……。」

「しずな君、早速で悪いんじゃないがの、例の教室に案内してやってくれい。」

「はい、わかりました。それじゃあヴァンプさん、こちらへ。」

「ハイ。」

源先生に促され、席を立つヴァンプ。

「学園長さん？用意するのはここにいらっしゃる方々の分ですよろしいですか？」

「うむ、美味しい昼ごはんを期待してるぞい？」

「ウフフ、頑張りますよ。それでは失礼します。」

二人はお辞儀して退室していった。

「それじゃあ僕らも行こうか？レッドさん。」

「あいよ。」

今度はタカミチ、レッドが出て行く。

「それじゃあ、学園長。いってきます。」

「フォッフオッフオ、頼んだぞい。」

「じゃーな、じいさん。世話になった。」

ボタン。

誰もいなくなった学長室。

「あの二人が果たして、この麻帆良にどういった影響を与えるんじやろうのお……。」

椅子に身体を深く沈めながら独り呟く学園長。

こうしてレッドとヴァンプ、二人の仕事が始まる。

太陽が麻帆良を照らし始める。

## F i g h t . 0 6 (後書き)

なんとか、この週一回更新のペースは守りたいので頑張って書かないきゃ！

誤字脱字ありましたらご指摘下さい。

感想お待ちしております！

## F i g h t ・ 0 7 (前書き)

毎週週刊ペースが維持出来るか、戦々恐々ですw

しかし、中々に作中の時間が進まない(; ㇿ)

キングクリムゾンした方がいいのかな？

そんな不安を抱えながらの最新話です。

相変わらずの駄文ですがお楽しみ頂ければ幸いです。

## F i g h t . 0 7

麻帆良に漂着して一日。

生活の為の糧を得るため、学園長の部屋へ。

そこで出会ったのは、かつての英雄の一員、高畑・Ｔ・タカミチ。

そして、学園長の手配により得た仕事。

学園広域指導員と飲食店経営。

レッドはタカミチと共に仕事のレクチャーのため、ヴァンプは経営させてもらうため試食テストの仕込みを開始するため、学園長室を後にした。

## - F i g h t . 0 7 -

- レッドとタカミチのお仕事 -

大分、登校してくる生徒も多くなってきた時間帯。

まだ時間に余裕がある為、ゆっくりと登校する生徒が殆どだ。

そんな中、駅から校舎に向かう生徒達の流れに逆らう赤と白の二人の男性がいた。

赤いマスクのレッドと白いスーツのタカミチである。

歩きながらタカミチが口を開く。

「僕達の仕事ってのは、学生間でのトラブルの対処が殆どなんです。」

「そんなにトラブルが起きんのか？」

「ハハハ・・・、ここの生徒達は良くも悪くも元気が良過ぎてねー。」

・・・」

遠い目をしつつ、頬をポリポリと掻くタカミチ。  
そっしている内に、駅前の開けた所に出る。

「今はそれほどでもないんだけど、もうすぐ一気に混みだすんだ。  
そうしたら僕らの出番です。」

「どんなことすりゃいいんだ？」

「まあ、事故なら防止とアフターケア、ケンカなら無力化とかそんな感じで。今日は僕の仕事を覚えてくれたらいいですから。」

「了解。」

広場に目を向けると、確かに徐々に人が増えてきている。

・・・しかも加速的に。

「オイオイ・・・、増えすぎだろ・・・。」

物の数分で広場は人ごみで溢れかえった。

「今くらいの時間から、遅刻間際の電車が到着するまでが一番多くなるんです!」

タカミチの説明を聞きながら、レッドは目の前の景色に絶句した。  
そうこうしていると、ある一角で大勢の男性が集まって騒いでるのをタカミチとレッドが発見した。

「んだあ!？やんのかコラア!？」

「上等だ!コラア!後悔すんなよ!アアツ!？」

空手着と柔道着の団体が睨み合っている。

「また彼らか・・・。」

「また？前もあつたのか？」

「うん、・・・空手と柔道どっちが強いかってしばしば騒ぎになるんだ。」

「しょーもねーなー。こいつ等は、『無力化』でいいのか？」

「ハハ、お手柔らかにね？」

一触即発の二団体の間にタカミチとレッドが割り込んで並び立つ。

「そこまでだよ、君達。」

スーツのポケットに手を入れたタカミチと首をボリボリ掻いて気だるそうなレッド。

急に現れた二人に驚いた彼らは更に騒ぎ出す。

「アアン！？何だデメーら！？マスクなんかしやがって！」

「おい、赤いヤツの後ろにいるの、デスメガネだ・・・。」

「デスメガネ！？アイツが！！？」

「いくらデスメガネでもこの人数なら・・・。」

デスメガネ・・・、それは広域指導員としての高畑・Ｔ・タカミチの異名である。

たった独りで数十人の暴徒を鎮圧した際に付けられたものである。それ以降、チンピラなどには恐怖の代名詞になっている。

「君達？ここいらでお開きにしてくれるなら僕からは何もしないんだけどな？」

柔らかな物腰で解散を促すタカミチだが・・・。

「上等だあ！！デスメガネ倒して俺達が麻帆良最強だあっ！！」

その余裕な態度が、彼らの荒んだ心の火に油を注いってしまった・・・。

リーダー格の男の怒号が掛け声となつて、一斉に襲い掛かつてきた！

「やれやれ・・・、元気だねえ。」

「この奴等は、こんなばつかなのか？」

「ハハハハ・・・、否定できないな・・・。」

苦笑しながら迎え撃つタカミチと、呆れながらのレッド。

ドサツ、バタツ！

糸の切れた人形のように倒れていく

音も無くポケットに手を入れたまま周りを鎮圧していくタカミチ。

「（へえ？拳で居合いみてーなことやってんのか？またマニアックな闘い方してんなー。あの速度と正確さなら、一般人にや何してつかわかんねーまま倒されてんだろーな・・・。）」

「（あの赤いの、ボーっとしやがって！！デスメガネは無理でもアイツなら！！）うおおっ！」

タカミチの戦闘スタイルを見ているレッドに不意打ちを仕掛けるのが数名。

「あん？大人しくしてりや怪我しなくてすんだのによ・・・。」

不意打ちの攻撃を気だるそうに全て避けるレッド。  
避けた際、全員にデコピンを叩き込んで無力化していく。

「うおおおお！イテエエエ！？デコピンの痛みじゃねええ！？」

「うつうつ・・・。」

「い、痛てえええ・・・！」

「頭骸骨が陥没したみてえな痛みが・・・！」

「おおおおお・・・！？」

「拳骨の痛くないんじゃないか・・・？」

全員気絶させて静かなタカミチと違い、レッドの方は痛みによる地獄絵図が出来ていた。

これから数多の不良をデコピンで悶絶させる・・・、デスメガネと双壁をなす最強の広域指導員『デスマスク』が誕生した瞬間だった。

「つ、強ええ・・・。」

バタリ・・・。

結局、にらみ合ってた2グループまとめたの大乱闘に発展したが程なく鎮火。

タカミチ、レッド共に無傷どころか息ひとつ乱してはいなかった。

タカミチがどこかに電話をしている間にレッドは倒れてるチンピラ達を（引きずって）道路の隅っこに片付けていた。

「ここはこれ位かな？このまま巡回を続けて行くのか。」

「コイツらはこのままでいいのか？」

「うん、救護班に連絡したからね。あとは彼らがやってくれるから。」

「そーか。んで？次はどこ行くんのだ？」

「巡回ルートがあつてね。軽く教えておこうかな。」  
「あいよー。」

そうして、二人は駅前広場を後にした。

最初のトラブル以降大した問題もなく昼前になったのでヴァンプのいる調理実習室に向かった。

- s i d o o u t -

- ヴァンプのお仕事 -

ヴァンプとすずな先生は調理実習室へと向かっていた。

「さ、こちらになります。ヴァンプさん。」

調理実習室に入ると、既に大概の食材は用意されていた。

「わ！スゴい！こんなに沢山あると、なに作るか迷っちゃうな。」  
「

用意された食材を見て、はしゃぐカリスマ主夫。

「ふふつ。本当に料理が好きなんですね？」

「ええ！生きがいですから！」

はしゃいだ所を見られて恥ずかしくて赤面しつつもキツパリと答え

る悪の幹部（笑）

「お料理のお邪魔になりますし、私は職員室に戻りますね。」

「あ、はい！お昼、楽しみにしててくださいね？」

「ふふつ。楽しみにさせてもらいます。それじゃあ失礼しますね。」

独りになったヴァンプは料理に取り掛かる。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

ガラッ。

調理実習室の扉が開かれる。

「おーい、ヴァンプやってつかあ。」

「あ、レッドさん。そちらのお仕事は終えられたんですか？」

「おう、今日は軽くていいんだと。んでいい時間だからよ、オレは直接こっち来た。高畑は学園長とか呼びに行ってるわ。」

「そーですか。こっちももう出来ますよ。」

ガラッ。

再び扉が開かれた。

「ふおっふおっふお、やっとなるかね？ヴァンプ殿。味見しに来たぞい。」

「ご馳走になりますね、ヴァンプさん。」

「いやあ、エヴァから美味しいって聞いてたから実は朝から楽しみなんだ。」

学園長、しずな先生、タカミチがやってきた。

「あ、皆さんようこそ。もう出来ちゃうので、お座りになってくださいね。」

「ウム、ワシら三人が美味しいと言えば合格じゃ。期待しとるぞ？」  
「はい。」

会話しながらも全員分の昼食を準備していくヴァンプ。

「はい！お待たせしました。」

完成した昼食を配膳していくヴァンプ。

「今回は・・・、鯖の味噌煮と大根のお味噌汁、炊き込みご飯と小松菜のおひたし、白菜の浅漬けです。」

「ほう、これは見事な！」

「ホント、美味しそうですわ。」

「珍しくエヴァが褒める訳だ。」

三人とも料理を見た反応はいいようだ。

「ホントは浅漬けじゃなく又力漬けをお出したかったんですけどね。ささ、冷めない内にどうぞ。」

「ウム、そうじゃの！正直もう辛抱たまらんわい！」

「ええ！早く食べましょう！」

「ふふ、学園長に高畑先生？慌てなくてもお食事は逃げませんよ？」

辛抱できない二人に苦笑するしずな先生。

「んん、それもそうじゃ。では・・・。」

「「「いただきます。」」」

ちなみに既にレッドは食べ始めている。

しばらくして、全員食べ終えた。

「いやあ、ヴァンプ殿！大変美味じゃった！」

「ええ、ホントに美味しかったですわ。」

「これは文句なしじゃないですか？学園長。」

「うむ！文句なしじゃわい！」

「やりましたよ！レッドさ〜ん！」

「あー、はいはい。オメデトさん。」

はしゃぐヴァンプを冷めた様子であしらうレッド。

「ヴァンプ殿、早速今から店の改装と住居の手配をさせるからの。  
また詳しいことは追って連絡しよう。」

「ありがとうございます〜！」

無事、審査を無事クリアしたヴァンプ。

レッドとヴァンプ、二人が麻帆良にて生活する準備が整い始めた。

「ふむ、あと二人に渡すものがあるんじゃない。」  
「こちらです、どうぞ。」

学園長の言葉を受けて、しずな先生が二人に携帯電話を渡す。

「仕事用に渡しておくぞい。何かあったらこの携帯にかけるからの。」

「わかりました。」

「レッド殿は晩にもう一度来てもらう。警備員として顔見せをするでな。」

「あいよ。」

「では、これで解散じゃ。」

こうしてレッドとヴァンプは学校を後にした。

## F i g h t ・ 0 7 (後書き)

誤字脱字、指摘や意見ありましたらお気軽にどうぞ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0215y/>

---

ネギま！太陽の戦士

2011年12月3日20時49分発行